

平成29年度 戴帽式

5月26日金曜日、あいにくの雨でしたが、2年生の戴帽式を挙りました。

厳かな雰囲気の中、ご来賓、保護者様、教員、在校生に見守られ、看護師となる決意を新たにしました。

「戴帽式の意義」

戴帽式は、近代看護の祖 F・ナイチンゲールの看護の精神を、看護者になろうとする者が受け継ぐ“看護師の原点”ともいえる儀式です。戴帽式は西欧で修道女がイバラの冠を被って一生を神に仕える誓いを立てたことに由来しています。

看護師のシンボルである帽子は中世の尼僧の被りものを示し、儀式は入信式に由来するといわれます。

人々からよく見える頭の上にある“白い帽子”は、看護の精神（博愛、献身、責任、公平、平等、等）を象徴するものとして、病み苦しむ人々の傍らにあって看護師としての責任と使命感をもって、社会に貢献する姿を表しています。

看護師が着用する白衣の“白”は偏見や先入観を捨て、客観的にありのままをとらえる科学者としての目と、清潔感・無垢・公平・自在性をイメージさせる白が人々の心を多面的にありのままをとらえられる看護者の柔軟な心を表しているとされています。



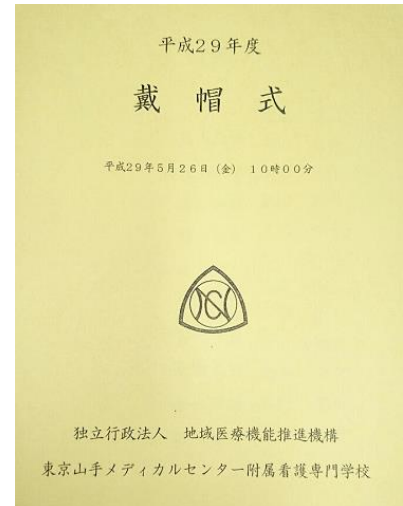
キャンドルの灯は、暗闇の中の一本の小さなろうそくの光が、救いを求める人々に希望の光となり、癒しをあたえます。敵・味方の区別なく人々の救いを求める気持ちを受けとめた“ランプをもったレディ・ナイチンゲール”の暖かさや温もりの心を受け継ぎ、先輩から後輩へとその心を継承していく様を表し、戴帽の儀式と合わせて行っています。

近年、看護師がキャップを被ることの是非については、様々な視点から議論され、本校でも平常の実習の場では、キャップは被っていません。しかし、病める人々を対象にし、常に生命の尊厳と個々の人格を尊重できる人間愛に満ちた、豊かな知性と感性を備えた看護専門職者を求められていることは、時代が変わり、価値観が多様に変化しても変わらず求められる姿です。



人々から尊重されるに値する看護の精神を象徴するキャップが、看護師の頭にある・なしに関わらず、最も人々の身近にいる専門職業人として、安全で安心していただける医療を提供できる看護者になることを、目指していきます。1年次に基礎看護学を学び、さらに看護の専門科目を学んでいくにあたり、今日の戴帽式を原点にして、改めて看護の意味を考え、看護の道を歩む決意を新にし、看護専門職の使命と責任を自覚し、社会から高く評価される職業人となるように、人間的に成長しつづける決意を誓うものです。

戴帽式にあたりナイチンゲール誓詞をもとに看護について考えを深めました。ここに2年生27名は、看護を学ぶ者として自分たちの言葉で自らと皆様に誓います。





誓いの詞



私たちはこの灯のもとに誓います。
命を預かる者として、自覚と責任を持つことを
知識・技術の向上に励むことを
多くの職種と協力し、質の高い看護を目指すことを
看護の対象となる人の尊厳を守り、寄り添いつづけることを
そしてこの誓いを胸に仲間と支え合い、
看護の道を歩んでいきます。

